

# 大阪ごみを考える通信

NPO 法人 大阪ごみを考える会  
<http://osaka-gomi.sakura.ne.jp/>  
【連絡先】吹田市江坂町 4-23-7-309 水川方  
TEL/FAX (06) 6338-3908  
EMAIL : [info@osaka-gomi.sakura.ne.jp](mailto:info@osaka-gomi.sakura.ne.jp)  
【郵便口座】00960-9-25143

2025年度 NO. 5 2026. 1. 31

## 目次

### 1. 2025年大阪・関西万博におけるゼロウェイストをめざしたのか？

4月から半年間の大阪・関西万博において、大阪ごみ減量推進会議の提案により万博会場内でリユース食器の使用、3Rステーションの設置、給水機によるマイボトルへの供給などが実現した。中でも給水スポットは暑い期間中、冷たい水をマイボトルに汲めるとあって大人気だった。リユース食器や3Rステーションには数々の課題が見られたものの、これを契機に2027年の横浜園芸博を初め、今後の大型イベントにゼロウェイストの取り組みを継続して行っていただきたい。大阪ごみ減量推進会議の山口さんからの投稿です。

### 2. シンポジウム「廃プラスチック問題を解決するために」について

大津市の松村さんは、家庭からの廃プラスチックのリサイクルについて、多種多様なプラスチックを一緒に集めてから材料リサイクルに有効なプラスチックを選別する、現行のシステムに無駄が多いことに気づき、家庭ごみの分別方法に疑問がわいたことから専門家を招いてシンポジウムを開きました。その結果を提言にまとめる考えです。

### 3. 【私の履歴書】(その5) 地域に還った住民とつながる

阪野さんは定年退職した人が集う組織作りに関わり、また地域でも子ども食堂を立ち上げ、価値観の違いから対立が生まれるところを、社会活動家の湯浅誠氏の考えに救われました。コロナ禍でも活動を絶やさない工夫をし、乗り切りましたが、場所の移転問題やメンバーの健康状態により活動を閉じられました。

### 4. 第2弾 まさかまさかのとんとん拍子

東大阪市は植田油脂㈱との協定を2024年に締結しました。廃食用油回収場所の設定がなかなか進まない中、回収拠点の要望を環境部に提出、のらりくらの行政ですが、ある人物に出会ったことが、とんとん拍子に話が進んで行くことになりました。

### 5. 加藤さんのコラム ある原爆孤児の話 (1)

1945年8月6日、広島に原子爆弾が落とされた日、小学校の地下にいて奇跡的に助かった少年の話です。母親は行方が知れず、親戚を訪ねても親身になってもらえなかったところ、ある朝鮮人がやさしくしてくれ、故国に帰る際に一緒に連れて行ってくれたのです。しかしその後、少年には過酷な人生が待ち受けていました。

## 2025 大阪・関西万博におけるゼロウエストをめざしたのか？

大阪ごみ減量推進会議 幹事 山口百合子（グリーンコンシューマー大阪）

「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに4月13日から10月13日まで184日間開催されました。大阪ごみ減量推進会議は、2021年から2023年に地球環境基金の助成を受け、万博でのゼロ・ウエスト（焼却ごみ・埋立ごみゼロ）を目標に、万博協会への提案として、リユース食器・堆肥化可能容器の試作と使用実験を実施していった。

博覧会協会は、開幕直前の2025年3月に発表した「EXPO2025 グリーン・ビジョン」では、分別排出された資源のリサイクルの徹底、リユース食器の運用計画の具体化、マイボトルの持ち込み推奨などが盛り込まれた。

### 3R ステーションの評価

会場内は50カ所の3Rステーション（10品目8分別）が設置されました。しかし、チェックした結果、場所により品目ボックスの並べ方がバラバラだったり、多言語表記がなかったり当初は担当者が常駐、非常駐バラバラだったのを協会に5月に緊急提言しました。その後、担当者を全ステーションに配置された結果、まずは分別がスムーズにできたようだ。ただ、「紙類」に紙コップを入れるのか、燃やすごみなのか、汚れたプラスチックのごみはプラスチックなのか燃やすごみなのかは、その状態を問わず素材で分別するのが外国人に多く、どちらも汚れた容器は燃やすごみに入れるのは日本人が多いと言う結果は下記の行動調査で分かった。

3R分別は「燃やすごみ」「燃やさないごみ」区分はやめ、「紙類」「プラスチック」の方が分かりやすい。9月10日、21日の2日間ボランティア延べ20人で3Rステーションに人間行動をもとにした調査をした大正大学の岡山朋美さんが分析結果を報告されました。（2026.1.16 第4回セミナーより）

その前段の8月9日から17日の間は、北海道大学大沼研究室の調査グループと共同で3Rステーションとリユース食器実施場所を人の行動チェックをボランティア募集して延べ70人で、猛暑の中実施しました。日本人か外国人か。年齢の識別。どのようなごみの捨て方をしたか、リユース食器は間違いなく返却できたかなどです。



会期中の一般廃棄物の排出予定量 3,394 トンに比して、実際は 2,033 トン、1日1人当たり 179g と愛知博での 234g と比して少ない。20年前の愛知博（2005年）を予定量としているが、時代も大きく変わったので、予定量の比較が甘すぎるのではないかと、専門家や一般廃棄物担当者の感想だった。さらに、会場内ストックヤードに持ち込まず独自に会場外に搬出処理している業者もあったとのこと。さらに、リサイクル率は57%、愛知博56%とほとんど変わっていない。協会による最終実績値は今後公表される予定だとのことだ。

## リユース食器の導入は一部だけど、6 か月間の大型イベントは画期的だった

リユース食器のネットワークの市民活動から 20 年、非営利活動団体として参入したエコトーンは、フードトラックエリア 9 カ所のうち 6 カ所で実施した。導入店舗ではリユース食器の返却を呼びかけるポスターを掲示しているが、座る場所が少ないところでは、椅子のある所で移動していき 3R ステーションにはリユース食器返却サインがなく、ごみに入れられることが多かったようだ。5 月のに緊急提言の 1 つに 3R ステーションに返却 BOX を設けること、来場者への周知を入れた。回収事業者も、ごみとしてまぎれたリユース食器をサブストックヤードで回収されたと聞く。まず利用者の認識を高めることが大切だ。しかし、3R ステーションに回収 BOX の設置は最後までなかった。

課題は洗浄場所が会場内で確保できず、京都の事業所までの往復の CO2 排出問題は、エコトーンにとっても課題になったようだ。大阪では、大型のスポーツ、野外でのコンサートなども多く開催され、リユース文化を広めていくには、大阪での洗浄場所の確保が重要になってくるのではないかと。

## 給水スポットは猛暑つづきで大人気

マイボトル持参が日常生活に根付くきっかけに、その行動がプラスチック削減につながることで実感できたのではないかと。日々、長蛇の列がそれを物語っていた。

メーカーである(株) OSG コーポレーションが会場内に 52 台を冷水給水機を運営費含めて無償で設置した。併設して何カ所かにボトル洗浄機が設置されており、これも大阪のメーカーである象印が社会実験として設置し、しゃべる洗浄機として人気だった。なお、万博協会は常温で旧来型のを設置して、給水より暑さしのぎで手などを洗う姿はみられたが、ほぼ素通りだったか人だかりはなかった。

OSG さんは、長期間にわたり自腹で設置した給水スポットのメッセージを来場者に①気候変動の啓発②熱中症対策③プラスチックごみ削減を 1 人 1 人の行動変容で気づいてほしいの意味だと、2025 年の第 1 回ごみ減量セミナー(2025.10.31)で語られた。「未来社会の実験場」と実践した結果、会期中の給水回数 1,200 万回超となりペットボトルの削減＝プラスチックの削減が海洋プラスチック汚染を抑止するのが社会課題として、市民も今後街に普及していかねばと感じた。

## SDG s 万博市民アクションを様々な団体と取り組んで

①市民参加②資源循環③交通・大気環境④持続可能な調達⑤自然再生・生物多様性⑥大学生と一緒に「万博の SDG s ・平和・人権」を考える 6 つの分科会で 2024 年から話し合いをすすめました。HP での発信とガイドブックの作成をして、大阪ボランティア協会から「万博を契機とする市民・NPO のまちづくりへの参画・協働拡大への提案」を日本博覧会協会に提出した。万博会場内のボランティアスタッフの部屋などに置くことができ、あらゆる分野でこれからもボランティア活動への参画を呼びかけました。

2027 年横浜園芸博覧会(会期は 4 月～10 月)にむけて、25 年の大阪・関西万博の SDG s に基づいた総括とこれからの大型イベントが持続可能性にもとづく開催なのかを開催地、関東エリアの NGO/NPO などと連携することとなりました。各分野で活動してきたことをまとめ、2027 年に開催予定の横浜博覧会へつなげる提言書をまとめました。

～大規模イベントを契機に” 当たり前 ” を変えよう～は、資源循環としては、下記の通りをまとめました。

2030 年プラスチックごみ 30%削減(ブルーオーシャンビジョン)に向けて大阪・関西万博のレガシーを構築するために、リユース食器、給水スポット、ごみ・資源の分別について、大規模イベントルールを設け効果的な運用方法を設ける。ごみの減量目標や資源化目標を精度の高い現状把握をしチャレンジングに打ち出す。日々の数値公表し、実践は市民参画は必須であることを提案した。

## シンポジウム「廃プラスチックごみ問題を解決するために」について

環境カウンセラー（市民部門）

大津市プラスチックごみ削減勉強会・代表

松村 順子

12月13日（土）、大津市生涯学習センターで、大津市プラスチックごみ削減勉強会主催のシンポジウム「廃プラスチックごみ問題を解決するために」を開催しました。この勉強会は、2020年に第2期大津市環境基本計画策定にむけた市民会議のワークショップで出会ったメンバーを中心に発足しました。川・湖に散乱するプラスチックごみ問題や廃プラスチックのリサイクル問題を主にとりあげ、勉強会や施設見学会を開きました。近年は、子ども向けのエコイベントでプラごみクイズをし、SDGsや3R推進のための啓発活動もしています。

我々の生活の必需品となったプラスチック類は、生産から廃棄まで問題を発生させますが、悪者なのでしょうか。法律や大津市のごみの現状を学び、大津市容器包装プラスチック再資源化施設と焼却施設の見学会を行い、分別回収された容器包装プラスチック類のゆくえを追跡してみました。すると、容器包装プラスチックリサイクル法に従う、大津市の現行のプラスチック容器包装類のリサイクルの体制が、百年の計なのかと疑問が湧きました。また、海ごみの多くをしめるプラスチックごみは、リサイクルが機能していないためとも言われることから、プラスチックごみの有効利用や資源循環を分別から考え直す必要があるのではないか。市民目線でそう考えました。そこで、廃プラごみ問題解決にむけたヒントや家庭ごみ分別の課題を探るため、プラスチック開発の研究者、廃プラ問題に精通した専門家の話を聞き、我々の主張を知ってもらい共に考えるために、シンポジウム開催を決めたのです。このシンポジウムの目的は、容器包装プラスチックごみの処理を費用負担と環境負荷の大きいリサイクル中心の現状から脱却し、有効利用のためにも多種類を混合で回収する現行の分別収集の方法をやめて、燃えるごみとして焼却施設でのごみ発電でエネルギー回収をする体制にしたい。ただし、リサイクルが有利なプラスチックの種類は徹底的に分別して材料リサイクルによる資源循環が国内循環する体制に改善する方がよいだろう。そのために家庭ごみの分別はどうあればよいかを正面から話し合い、このシンポジウムの結果を提言にまとめることでした。

当日は、45名ほどの熱心な参加がえられ、我々が直面している環境問題の中でも、プラスチックごみ問題の解決方法を探ることは喫緊の課題だと、多くの人が認識していることを実感しました。

第1部の基調講演では、鍵谷司氏（環境計画センター会長代行）、徳満勝久氏、（滋賀県立大工学部材料化学科教授）竺文彦氏（元龍谷大学環境ソリューション学科教授）から、それぞれの研究や専門分野での知見による専門的な話を聞きました。多様化し複合素材が増えている容器包装類は、リサイクルできるプラスチックとできないものを分けて、有効にリサイクルできないものは焼却処理をする方がよい。廃プラスチックを焼却発電しても、CO<sub>2</sub>排出量が増えるとは限らないこと。環境にやさし



いとかエコとか CO<sub>2</sub> 排出量をイメージで判断しないで、視点をかえてみるのが大切とのお話は、大いにヒントになりました。第2部では、地域活動をしている3人のコメンテーターや大阪ごみを考える会の森住氏から貴重な意見が出され、参加者との意見交換もできました。アンケートには、「今まで知らなかったことがわかった」「プラスチックごみは、燃やして発電に使う方がよいと思う」などの率直な感想がありました。小さな勉強会が開いたささやかなシンポジウムながら、これが終結ではなく、参加者の熱意や意見を土台にした提言をまとめます。草の根活動の力を発揮して、各主体との連携を模索しつつ、改善案の実現をめざして一歩ずつ歩みを進めたいと考えています。

## 【私の履歴書】(その5) 地域に還った住民とつながる

阪野修

< 15 > 隣の街でも = S S 倶楽部 =

退職後しばらくの間、自宅から自転車に乗って大和川を超えて堺市役所1階のNPO支援センターに出入りした。ちょうど団塊世代の大量退職期であり、地域として「どのように受け入れるか？」が課題となった。堺市福祉課からも相談があり、「企業戦士が即地域に登場しても喧嘩になる」となり、退職者向けの市民大学を開講した。大阪府大や関大とも連携し、コロナ禍の影響もあつたが今も盛況なり。そして、卒業生が任意で参加する「S S 倶楽部」も立ち上がり、毎月ニュース発行やS S 塾を開催し、ハイキングや麻雀クラブも立ち上がった。

ここには企業の元トップや様々な業種の元サラリーマンなどが集まった。

びっくりしたのは、S S 倶楽部への入会条件で「審査の上 入会可」とあり、「それ、誰が判断するの？」となった。市民運動の世界なら、まずは「趣旨に賛同と入会金支払で全員加入、問題があれば後から除籍も」となるが、企業経験者は各種経済団体の連合会への加入条件に倣ったらしい。「ここは市民運動と同じで」となった。

麻雀を巡っても面白かった。堺市での事業仕分けで「市の補助金を受けながら麻雀！」と批判の声が上がった。「賭け事禁止、たばこなし、夕方まで」の約束事を守る健康麻雀であり、「昔亭主の麻雀で苦労した。いつかは私もしたかった」と言う女性たちも参加していた。事業仕分けでは「中止せよ」となったが、会場を自前で用意することで今も元気なり。

市民塾の月1回開催は講師探しで苦労したが、地元の人々や企業・市民団体を詳しく見つけることになる。様々な価値を持つ人々の活動と繋がるきっかけとなった。

また、歴史ある堺での活動は、地場産業の底力も実感する。江戸時代中期には鉄砲製造が禁止され刃物や自転車産業に繋がった。そして今、刃物業界は家族労働で鍛冶・刃付(研ぎ)・柄付けの3分業で1本の包丁を「横受」しながら完成させる。大手企業中心の「元受け→下請け」の体制ではプロの料理人が愛用する一流の包丁の製造は出来ないし、アジアへの工場ごと移転が進み地場産業そのものが廃れたかも。3分業は、不景気になった時にも強みを発揮する。時には廃業が出現しても、隣の同業者が受け継ぎ地場産業を守っていく。但し、今は家族労働でもあり後継者不足を心配するが。全国で街づくりなどが盛んな今、この「横受」の関係性の研究を薦めたい。

## < 16 > 多様性が一杯 = 子ども食堂 =

住吉区で第1号の子ども食堂を立ち上げ、他の子ども食堂とも連携し住吉区子ども食堂連絡会も立ち上げた。「子ども映画祭」の主催と共に12団体の統一チラシを作成した。区内全小学校を通して配布するため、教師の仕事を増やさないようにクラスごとに袋詰まで行った。残念だったのはコロナ禍で、子どもが多く集まる「居場所」を創り出す会食が出来なくなり、弁当形式となったことである。それでも、利用する子どもの人数は増え、親との密接な関係性は個別に深まった。どんな場でどんな条件であっても、出来ることを見つけ出し取り組むという作風が身についた。

(森住補足：当時マスコミは子ども食堂は地域で困っている人の支援対策と言っていたので阪野さんが地域の自治会等に挨拶に行ったとき、この地区は困った子供がいる地域でない！と良い顔をしない人もいた。それで彼はその側面でなく、子育てが終わると彼らとの付き合いが減ってしまいコミュニティが寂しくなる、それを改善する良い手やねんと説く知恵を生み出した。)

子ども食堂で気づいたことは、多様性を持つ市民運動の強さである。各団体に共通するのは「食中毒を出すな」だけで、決まった規約もない、食事代もバラバラ、日常活動を報告する機関もなく運営実態はマチマチ。子ども食堂が広がっていく当初には、「子どもの貧困は学力の低下に繋がっている」が話題となり、「食事の提供だけでなく学力支援も行うべき」と「出来るところはやりなはれ」との意見の対立が全国的にあった。

この時、社会運動家の湯浅誠氏の「どっちも子ども食堂だ」との一言が多くの人々の共感を呼び、子ども食堂運営者は「多様性」のすばらしさを身に着けた。湯浅誠氏は、少年時代に障がい者の兄を連れて同級生たちと野球などで遊んでおり、そこで「参加者みんなが納得する特別なルール」を編み出すコツを身につけたとか。そうなのだ。社会的にガチガチの規制・ルールより、緩やかでもみんなが納得・楽しむ特別ルールが大切だ。

我が子ども食堂は、場所の移転やメンバーの健康状態などもあり、運営費の残金を連絡会に寄附して7年間の活動を閉じた。「やり切った」。

森住注：阪野さんは、生協活動の枠を超え、地域住民とのつながり方を学ぶため、大阪市大（当時）の社会人大学院に入学し、そこで上から目線の国をどうすべきか？でなく、一住民として自分が住んでいる地域を良くするところから始める際役立つ思想と手法を学びました。それがこの履歴書では買われていますが、< 16 >で見事に華が開いています。



## 第二弾 まさかまさかのとんとん拍子

東大阪のごみを考える市民の会 中村智子

家庭から出る廃食油について、他市では早くから植田油脂(株)と協定を締結し資源の有効活用と CO2 削減に努めるべく回収されていましたが、私の住む東大阪市では8ヶ月遅れて2024年8月5日に協定を締結しました。

それに伴い、家庭から出た廃食油を鶏の飼料にするのではなくバイオディーゼル燃料にするのが本当に良いのか? 様々な疑問を解決すべく植田油脂の石渡氏を当会にお招きし勉強会を開催しました。その後、私も会員である東大阪市民環境会議(様々な分野で環境活動しているグループから形成された、20年以上続くNPO法人)の総会でも再度、石渡氏にお話しを伺い疑問点を質問しました。

◎家庭から出る廃食油は何が混入しているか分からないため、鶏の飼料に使えない

◎発火点は360°C、引火点は250°Cとされており、常温で燃えることは通常ない。

などお答えいただき納得し、当会を挙げて廃食油回収に協力させていただこうと活動し始めました。

先ず、回収BOXの設置場所について、各地域の市民がそれぞれに持って行きやすい場所と考えた時、東大阪市の各リージョンセンター(地域活動の活性化と市民サービスの向上を図るため「市民プラザ」と「行政サービスセンター」を併せた施設でオープンスペースやサークルなどが有料で利用できるホールや和室、会議室などがあり、現在、古紙・小型家電・電池・蛍光灯など資源回収拠点にもなっており、東大阪市内に7ヶ所点在している)がベストであると意見がまとまり、令和7年10月20日、東大阪市長宛にリージョンセンターを回収スポットにしてもらうという『廃食油回収拠点要望書』を環境部循環社会推進課の課長に手渡しました。

その後、機会があるごとにチラシを配り啓発しています。毎年11月3日に開催される東大阪国際交流フェスティバル(東大阪には87ヶ国、21,578人の外国人が暮らしており、多様な国籍の方々と文化の交流を深めるために開催)では資源ステーションを担当。ほぼ終わりかけた時に各出展団体(37団体)に聞き込み、油を使った団体には丁寧に説明しチラシを配布するなど惜しめない啓発活動を行いました。また、循環社会推進課課長にはメールで活動報告を兼ねてその後の経過を伺っていましたが、「循環社会推進課内で情報を共有した」だの「現在は市政情報相談課に申請中」だの、のりくりで進捗状況が全然つかめない様子にイライラしていました。

そんな時、国際交流フェスティバルで野田しょう子市議会議員さんにお会いしチラシをお渡ししてSAFではなく高純度(B100)のバイオディーゼル燃料にした方がよいこと、その廃食油の回収拠点にリージョンセンターがベストであると考え要望書を提出したが返答がない事、東大阪で回収した廃食油リサイクルのバイオディーゼル燃料を市の清掃車に使用したら良いなど熱く語ってしまいました。なんと、野田しょう子議員は現在、環境産業委員会に所属されておられるそうで、「私も勉強させてください」とおっしゃって頂き11月の定例会へお誘いし出席していただきました。

そして、「私、環境部の人と仲が良いので…」「私、言います!」と力強いお言葉を残して帰られました。その後、12月議会の本会議で質問して下さり、環境部長から「今年度中(令和8年3月末)に7ヶ所のリージョンセンターに回収BOXを設置します。」と答弁、確約を取っていただきました。

まさかまさかのとんとん拍子に事が運び、感謝するとともに、今後は如何に多くの市民に普及・啓発するか方法を考え、回収実績を増やすことに、より一層努力しなければと決意しました。2月10日には植田油脂(株)大東新田工場の見学をして更に勉強してきます。

ある原爆孤児の話(1)

加藤 昌彦

世界で戦争が繰り返され、そのために戦争孤児が路上に放り出されている。孤独と不安のなかで、空腹をかかえ、寒さのなかを彷徨い歩いている子どもは世界中で何万いるのだろうか。

私はこの間、友人から、一つの本をいただいた。友田典弘(つねひろ 1935年生まれ)さんの半生をまとめた吾郷修司さん著、『原爆と朝鮮戦争を生き延びた孤児』です。

1945年8月6日、広島市の袋町国民学校に遅刻した当時9歳の少年がいた。父は7歳の時亡くなっていた。学校は爆心地から450mの所にあった。朝礼をさぼって地下の下足箱で靴を脱ごうとしていたら、一瞬の大閃光と大爆風、大音響で記憶が消えた。気がついたら、コンクリートの壁にたたきつけられていた。地上に上がると、ほんの少し前に見た、整列して並んでいた生徒たちの姿はなく、焼け焦げた屍体が散乱し、校舎は跡かたもなかった。

被曝直後の市内の臭いで気分が悪く、少年は爆心地の北にある佐治山を登った。少年は防空壕のような洞窟で3日間、なにも食べることができずに過ごした

少年は家へ向かった。いたるところに黒焦げに屍体があった。川はうつ伏せの屍体で埋まっていた。戻った家には、焼跡だけが残った。買ってもらった自転車が骨だけになって残っていた。母の行方はわからなかった。親戚の家を訪ねて行ったが、心の傷つくことばかりだった。

途中で少年の家に下宿していた朝鮮人で靴職人の金山三郎という青年に出会った。金山は優しい人だった、孤児になった少年を連れて帰り、抱いて寝てくれた。金山は少年にとって命綱であった。少年は彼から離れずに生活し始めた。戦争が終わって金山は故国に帰ろうとしていた。金山は少年を韓国に連れて帰ることにした。

しかし、韓国には植民地支配者であった日本人の居場所はどこにもなかった。金山は故国に戻ってから結婚した。やがて子どもができる、金山の妻は少年に厳しく当たった。金山が遠出をしていた時に、少年は妻とけんかして出ざるをえなかった。

それから少年は路上の孤児となった。商店の掃除、手伝いなどをして、何がしかの駄賃で糊口をしのぐ生活が始まった。

私はこの冬の午後、大阪・釜ヶ崎の路上で寝ている老人を見た。私は母の介護で、畳の上で寝る母の傍の部屋で寝たことがある。その部屋は板張りであった。私は板の下から来る冷気に耐えられなかった。ホームレスの人が路上で寝る厳しさは想像以上だろう。ソウルの冬。マイナス10度になることも珍しくない。少年は孤児たちとあるいは一人で、路上で寝て暮らした。

1950年6月、朝鮮戦争が始まった、ソウルの南を流れる漢江の河畔でカマスの中で寝ていた少年の近くを、北の戦車がやってきた。それから戦争はシーソーゲームのように、少年の傍らで、朝鮮軍と米軍が一進一退を繰り返した。いつ爆弾が自分に命中するかもしれない。泣いても聞いてくれる人もなく、感情を押し殺すばかりだった。続きはお待ちください。